

令和元年5月20日現在

機関番号：32102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26350729

研究課題名（和文）我が国のライフセーバー育成に向けたコミュニケーション教育の方法開発とその実践

研究課題名（英文）The Development and Practice of Communicative Education for Training Japanese Lifesavers

研究代表者

立川 和美（TACHIKAWA, Kazumi）

流通経済大学・社会学部・教授

研究者番号：70418888

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：災害大国である我が国では、レスキュー現場で多くのライフセーバーが活動をしているが、従来、その育成においては、救助技術に関する指導やそれに関する研究が中心であった。そこで本研究では、救助活動において不可欠であるレスキューコミュニケーションに着目し、その能力獲得を目標とした教育の方法開発と実践を行った。

具体的には、まず、言語学とスポーツ科学との両領域からライフセービング活動におけるコミュニケーション行動の実態を分析した。その上で、ライフセーバー育成におけるシナリオレスキュー教材を作成し、その指導実践を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ライフセーバーの養成やトレーニングの現場、レスキューの現場におけるコミュニケーション活動に関する研究はこれまで行われてこなかったことから、これら実際の活動の音声・画像データを作成し、言語学、スポーツ科学の両領域から分析を行ったという新たな研究である点において学術的意義が認められる。

さらに、災害現場におけるライフセーバーの活動は、今後、これまで以上に重要なものとなることが考えられることから、対人活動である上で欠かすことのできないコミュニケーション技術の獲得、向上を目指した本研究は社会的意義を持つものと言える。

研究成果の概要（英文）：Disaster relief activities by lifesavers are essential for Japan which is a country subject to numerous natural disasters. It is common for them to study ways to save victims from danger. However, the skills of communicating with those victims or to other rescue workers is important. Therefore, the goals of this study is to develop teaching methods for communication during rescue operations and put into practice. The study represents an analysis of the actual conditions of lifesavers' ability to communicate while they are engaging in rescue work. In this study, both linguistic and sports scientific research are conducted in terms of discourse. In addition, lifesavers received appropriate instructions on how to communicate effectively during rescue operations on the supposition of disasters. Improving lifesavers' communication skills while they are working will directly improve the results of rescue operation.

研究分野：日本語の談話・文章に関する分析。国語教育・日本語教育。

キーワード：ライフセービング コミュニケーション ライフセーバー育成

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災では、多くのライフセーバーによるレスキュー活動が行われた。彼らはこうした緊急時や災害時の人命救助の他に、様々な事故防止や安全教育活動に携わり、社会で重要な役割を果たしている。現在では、地域のライフセービングクラブに加えて、大学などの教育機関でもその育成は活発に行われている。

こうしたライフセーバー育成の現場においては、専門的な救助技術の教育方法はすでに確立されているが、レスキュー活動に不可欠なコミュニケーション能力育成のための教育は、未だ整備が不十分な状況にある。また、「スポーツと言語」をテーマにした先行研究はごく少数で、各領域の個別的な例に限定されており、両分野の連携が取られているとは言い難い。さらにライフセービングは他のスポーツ競技とは大きく性質が異なる(救命救急を担う、コミュニケーション活動はチーム内にとどまらず救助対象者に及び多様である等)ため、この領域に特化した研究が必要である。しかし、ライフセーバーのレスキューコミュニケーションという課題を取り扱った研究は、国内外いずれにおいても行われていない。そこで我が国におけるレスキュー活動の成果向上のためには、レスキュー現場の実際と、日本語コミュニケーションの理論との両者を踏まえて調査分析を行うことが不可欠であり、それをライフセービング教育の体系的な方法論へと応用することは、現在、急務の課題となっている。

2. 研究の目的

レスキュー活動に必要なコミュニケーションの方策を、スポーツ科学及び応用言語学の両見地から解明し、ライフセーバーの育成に応用することを目指す。

具体的には、ライフセーバー育成におけるコミュニケーション指導の方法論を構築する。そのために、内外のスポーツ科学及び談話分析の研究を踏まえながら、ライフセービング活動や育成システムでのコミュニケーション活動の実態を明らかにし、事故防止や事故時の正確で迅速な救助を可能とするレスキューコミュニケーションの解明を行う。

3. 研究の方法

(1) 国内外におけるレスキュー活動及びコミュニケーション領域の先行研究のまとめ

周辺の研究の動向にも注意を払いながら、国内外のレスキューやコミュニケーションに関する資料を体系的にまとめる。また、国内におけるライフセーバー育成の実態について、現場の指導者に対してヒアリング調査を行い、コミュニケーション教育の方法論構築へと応用する。

(2) ライフセーバーの学生に向けた調査と分析

流通経済大学ライフセービング部部員(ライフセービングチーム、コーチングチーム)に対して、質問紙を用いてレスキューコミュニケーション(「ライフセーバーとしてのコミュニケーション能力と意識(日常時・活動時)」、「ライフセービング時のコミュニケーション活動の実態と問題点」、「ライフセービング専門語彙の知識と定着」)に関する調査を行う。この調査結果について、ライフセービングの経験年数や男女差などの観点から分析を行い、ライフセーバーとしての学生のコミュニケーション能力やそれに対する意識の実態を明らかにする。

(3) シミュレーショントレーニングを利用したデータの収集・整理と分析

流通経済大学ライフセービング部活動の実戦的トレーニング場面を利用し、そこに参加している全員のコミュニケーション活動を録画・録音してデータ化を行う。データ収集後、発話及び発話状況に関して調査分析の可否を図り、分析に必要な具体的な事項の確認を行う。その後、データをDVD化及び文字化(エクセルデータ)しデータベース化を行う。このデータについて、言語・非言語活動の意義や発話者の意図を中心に、コミュニケーションの実態を明らかにした上で、レスキュー時に不可欠な受信と発信の双方向のコミュニケーションのありようを明らかにする。具体的には、レスキュー活動を正確・迅速に進めるために必要な項目を抽出するとともに、現状のレスキューコミュニケーションの問題点に対する有効な解決策を考察する。

(4) 国内の海浜におけるライフセービング活動のデータ収集・ヒアリング

海浜(新島・館山・西浜)におけるサーフパトロールやレスキューのコミュニケーションデータの収集、ヒアリングを行う。ライフセーバーの無線におけるやりとりの現状、パトロール日誌の記録をデータとして収集するほか、各地域のライフセーバーに対して、海浜現場のレスキュー活動におけるコミュニケーション活動の実態、若手ライフセーバー育成に関するヒアリングを行う。

(5) 海外のスポーツ科学研究者に対するコミュニケーション教育に関するヒアリング

ライフセービング活動の歴史が古いオーストラリアなどを中心に、海外の各種スポーツ科学研究者や指導者を対象として、広くアスリート育成やチームスポーツ教育におけるコミュニケーション能力の扱いについて、調査を行う。

(6) ライフセーバー育成システムにおけるコミュニケーション能力育成のための教材開発
上記の研究を踏まえ、ライフセーバー育成において望ましいレスキューコミュニケーションを行う能力の獲得に向けた教材を開発する。併せて開発教材を用いた教育活動の実施、指導者に向けた教材開発に関するヒアリングを実施し、教材内容の充実を図る。

(7) 国内の自然災害に対する防災・救助活動に関する情報の実態調査

近年、日本国内では、地震の他にも台風や洪水等の自然災害が相次いで発生しており、そうした緊急時に想定される救助対象者の多様化に鑑み、日本人のみならず在留外国人も含めた防災意識や防災用語の定着、防災情報・災害時情報の発信や受信の現状を調査する。これらを応用し、多様なレスキューコミュニケーションに向けて必要な能力や技術を明らかにしていく。

4. 研究成果

(1) 国内外におけるレスキュー活動及びコミュニケーション領域の先行研究のまとめ

主に文献資料を中心に、先行研究の整理を行った。まず、ライフセービングにおける緊急時の対処スキルについては、海外において体育科の授業への導入や ARC(American Red Cross)による大学でのコース設置の例などが見られた。またスポーツとコミュニケーションに関しては、チームワーク形成、指導者によるコーチングなどの研究が多く行われていた。その一方、特に本研究と関連性の高い医療現場や救命救急士養成において行われるコミュニケーションに関する研究は数例にとどまり、ようやく開始されつつあるという状況であった。

また、現在のライフセービング活動の実態把握のため、ライフセービングフォーラムに参加し、ビーチパトロールや公的救助機関との連携を中心とした国内の情報を収集した。

この結果、ライフセーバーの養成においては、体系的なコミュニケーション教育が存在していないことが明らかになった。

(2) ライフセーバーの学生に向けた調査と分析

流通経済大学ライフセービング部に所属する学生を対象として、レスキューコミュニケーションに関する自由記述形式の調査を行った。

その結果、学生たちはライフセーバーとしてのコミュニケーション能力の必要性を十分認識しており、コミュニケーションスキルを身につけなくてはならないという意識を強く持っていた。そしてそうした力の養成は、トレーニングや現場におけるレスキュー活動にとどまらず、日常生活の様々な場面においても行われるべきであると考えられていた。

併せて、現場のライフセーバーには発信と受信の両方のコミュニケーション能力の充実が求められるが、大学生ライフセーバーには相手の立場に立って積極的に「話す力」が特に欠けていると自覚されており、重点的に指導を行っていく必要であることが分かった。

(3) シミュレーショントレーニングを利用したデータ収集・データ整理と分析

SERCの実践的トレーニング(シミュレーショントレーニング)場面の音声言語と非言語コミュニケーションの実際について、ボイスレコーダーとビデオカメラを用いてデータ収集を行った。このシミュレーショントレーニングをデータベース化して研究者間で共有し、スポーツ科学及び言語学の観点から言語・非言語コミュニケーションについて個々に分析をした。

その結果、ライフセーバーの言語の特徴としては、まず、予想以上に無意識に発せられる発話が多いこと、さらにそうした無意識の中でも発話者は発話意図を反映した言語活動をしていることが明らかになった。一方で、レスキューチームのメンバーは、発話者の意図を正確に認識しており、チームで行われる救助活動では、チーム内にすでに形成されているコミュニケーションルール(呼称・略語)が非常に有効に用いられているという結果が認められた。

また、フィードバックを通して、レスキュー時の発信と受信の双方向のコミュニケーションのありようを精査したところ、レスキュー活動中、インフォメーションやパトロールにあっては、比較的落ち着いたやりとりが可能であるが、救助の際にはゆっくりと会話することはできないため、表情、目の動き、動作、顔色といった非言語コミュニケーションが通常のコミュニケーション活動以上に重要な機能を果たしていることが明らかとなった。

本項目の結果に関しては、国際会議(EGSS)において、ライフセーバーのレスキュー活動を正確・迅速に進めるためのコミュニケーションストラテジー育成をテーマとして発表を行った。

(4) 国内の海浜におけるライフセービング活動のデータ収集・ヒアリング

学生ライフセーバーの実践の状況を更に詳細に調査するため、夏休み(2015年7月)を利用して、館山の海浜におけるライフセービング活動について現地調査を行った。実際の浜辺での具体的なケース(疾病救助、迷子対応等)に対して、ライフセーバーとしてどのようなコミュニケーションを行っているかを聞き取りし、そのディスコースの特徴を明らかにした。また、現地(館山・西浜・新島)での指導に当たる学生(責任者・警備長:いずれも3年以上の経験を持つライフセーバーであり、最も身近にライフセーバーの育成に当たる立場にある)に対して、ライフセーバーとして下級生を指導する上でのコミュニケーション能力の課題や問題点、工夫などについて聞き取り調査を行った。

この結果、ライフセーバー間のチーム意識の強化に対する工夫(意思の疎通をいかに円滑に

行うか)について、ライフセービング活動では様々な対人関係のケースが発生するものの、挨拶や言葉遣いが基本であり、それによってチーム内やお客様との信頼関係が築きあげられていくといった認識が共有されており、こうした基本的な言語生活が重視されていることが認められた。

この他、海浜の国際化に伴い、救助対象者が外国人になるケースが今後増加することと予想され、ライフセーバーの英語力の強化の必要性も指摘された。

(5) 海外のスポーツ科学研究者に対するコミュニケーション教育に関するヒアリング

海外のライフセービング指導の実態を調査するため、ECSSの会場において、スポーツ科学研究者に対して、スポーツとコミュニケーション技術に関するヒアリング、アンケートを実施した。その結果、ライフセービングの歴史が古く活動が活発なオーストラリアにおいては、各家庭にプールが普及し学校教育でもライフセービング教育が浸透している一方、コミュニケーション教育などに関しては、他のスポーツ(ラグビー等)との指導の連携は見られないことが分かった。また、その他の地域(ロシア、ノルウェー)のスポーツ科学を専門とする研究者へのヒアリングにおいては、対象とする種目(バスケットボール、ダンスなど)を問わず、コーチと選手、チーム内等でのコミュニケーションについて体系的な指導を行っているという回答は見られなかった。

(6) ライフセーバー育成システムにおけるコミュニケーション能力育成のための教材開発

ライフセービングの言語・非言語コミュニケーションの実態分析を踏まえ、コミュニケーション能力育成のための教材作成を行った。その際、リスクコミュニケーション教育教材のガイドラインや、医療現場のコミュニケーション研究、日本語教育におけるビジネスコミュニケーション教材など、スポーツ科学及び言語学の知見を援用し、レスキュー時の発信と受信の双方のコミュニケーションの談話構造枠組みに沿った教材とした。具体的には、ボードレスキューを活用したミニシナリオ(一部、救助者間での談話も含めながらも、溺者と救助者の関係に焦点を絞ったレスキューシナリオ)を作成し、加えて、ディスカッションやシミュレーショントレーニング等を組み合わせた指導案を作成した。

指導案の運用に向けては研究者間で討議を行い、実際のトレーニング場面を想定した指導に必要な項目を提示した。具体的には、「相手に納得して理解してもらう」ような話す技術を盛り込む指導を基本とし、内容が首尾一貫して明確であるという、いわゆる談話のストラテジーに加え、有事の際でも情熱を持って責務を遂行する、公正で冷静に判断できるといった精神的なあり方もコミュニケーションの一部と考えることを指摘した。加えてライフセーバーにおいては、「気づく」力、相手の話を「聞く」力の重要性を意識させる点についても言及した。

この他、言語的な発話ストラテジーとしては、「言いまわし、タイミング」に配慮することや、「適宜、お互いの信頼を示す指標となる終助詞やフィラーを取り入れる」こと、「情報の伝え方は簡潔に行い、文を最後まではっきりと発音する」ことなども盛り込んだ。

この他、現在、ライフセービングの専門用語に関する教材の作成も開始している。

(7) 国内の自然災害に対する防災・救助活動に関する情報の実態調査

ヒアリング等で指摘された対救助者の多様化を踏まえ、特に在留外国人に向けた防災意識及び防災知識の実態を調査したところ、防災訓練等は母国ではほとんど行われておらず、防災に関心はあるものの災害経験が乏しいため、どのようにして防災知識を得たらよいか、また防災意識を高めたらよいか分からないのが現状であることが明らかとなった。

また自治体等の防災マニュアルは、日本人向け以外に、外国人向けに「やさしい日本語」や中国語、ベトナム語、韓国語、英語などで作成されているが、内容の詳細さ(避難時に持参するもの、地震発生の確率)や、表現(避難指示の方法が曖昧)に改善の必要性が認められた。

この他、災害現場で想定されるコミュニケーションについての調査では、特にハイコンテクスト文化を背景とする日本語の特徴が、外国人にとって大きな不安材料となっていることが明らかとなり、ライフセーバーによる防災教育に際しては、日本人、外国人ともに積極的にコミュニケーションをとろうという姿勢を養成したり、自助力と共助力の両方の育成を意識したりすることが求められていることが分かった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

立川和美、稲垣裕美、小粥智浩、小峯力(2018)「ライフセーバー養成課程におけるコミュニケーション指導パイロットスタディ——ボードレスキューに関するミニシナリオ教材の作成」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』11 19-31.

立川和美、稲垣裕美、小粥智浩、小峯力(2016)「海浜のライフセービング活動におけるコミュニケーションに関する小考——館山・西浜・新島での大学生ライフセーバーの実践を中心に」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』9 11-25.

立川和美、稲垣裕美、小粥智浩、小峯力(2015)「ライフセーバー養成現場でのコミュニケーション

ョンに関する意識について」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』8 39-48.

〔学会発表〕(計6件)

立川和美(2018)「中上級レベルの留学生に際する災害時の自助力と共助力の育成：防災マニュアルを活用した防災知識の発信」第21回英国日本語教育学会年次大会(2018年8月31日～9月1日) ブリストル大学、ブリストル

立川和美・稲垣裕美・小粥智浩・小峯力(2016)「ライフセービング専門用語の習得に関する一考察 ライフセーバー育成への応用の観点から」日本海洋人間学会第5回学会大会(2016年9月24日～25日) 東京海洋大学品川キャンパス、東京

Kazumi Tachikawa “Communication Activities in Lifesaving Team Rescue: For Development the Methodology of Lifesaver Training.” 21st Annual Congress of the European College of Sports Science. (2016.7.6.-9.) Austria Center, Vienna.

立川和美・稲垣裕美・小粥智浩・小峯力(2015)「ライフセーバー育成の現場におけるコミュニケーション意識に関する調査」日本海洋人間学会第4回学会大会(2015年9月26日～27日) 東京海洋大学品川キャンパス、東京

立川和美(2015)「日本語コミュニケーション能力育成に向けた実践 アクティブラーニングを活用した緊急情報獲得のための中上級レベルの学習」第18回英国日本語教育学会年次大会(2015年9月4日～5日) ケンブリッジ大学ホマートンカレッジ、ケンブリッジ

立川和美(2014)「中上級の日本語教育における緊急時の情報獲得ストラテジー育成に向けた基礎的研究」第17回英国日本語教育学会年次大会(2014年8月22日～23日) リージェンツ大学、ロンドン

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：稲垣 裕美

ローマ字氏名：INAGAKI, yuumi

所属研究機関名：流通経済大学

部局名：スポーツ健康科学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20433568

研究分担者氏名：小粥 智浩

ローマ字氏名：OGAI, tomohiro

所属研究機関名：流通経済大学

部局名：スポーツ健康科学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：20358774

研究分担者氏名：小峯 力

ローマ字氏名：KOMINE, tsutomu

所属研究機関名：中央大学

部局名：理工学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：60382826

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。